《弾かざるピアニスト》

橘絲重

四谷左門

《臨　栖》

「森君！ピアニストで橘絲重つての知つてる？社会部から聴いてきたんだよ！」

机の向う側で受話器をとつていた木村が、こちら側で雑談している森に呼びかけて、受話器を差しだした。

「あゝ、橘絲重ね、ピアニストだよ」「ちよつと教えてやつてくれ」

森が受話器をとると、社会部長が電話にでゝいた。「森君か、橘絲重つて、知つてるかい」「エエ、上野の先生ですよ、古い……」「旨いのかい」「さあ……僕はきいたことないんですが、何しろもうお婆さんですからね。滅多に演奏しないんです」「ははア、つまり芸術院ては養老院なんだね。有難う」「橘さんて人はね、独身で」「フム」「ケーベルさん、東大で哲学を教えていたケーベル博士の愛弟子なんです、だから、岩波できいて久保勉さんにきくとよく判ると思います」「いや有り難う、全く文部省のやることなんて意味ないね。そんな誰も知らない婆さんを引つぱり出して芸術院会員にするなんて、じや失敬！」

忙しい社会部長はそれだけきくと電話を切つてしまつたが、森にしても橘絲重がまだ生きていることにはそれほど関心をもつていなかつた。けれど生きているとしたら、帝国芸術院ができて音楽家もそのメンバーに加わるとなると幸田延子、橘絲重の二人が会員に推されるのは、いかにも官僚のやり口の常道のように思われる。二人とも現役ではないが、上野の最も古い先輩で、教授としての官等もトップにあつたのだから。

それから卅分ほど経つて、森は社会部長に頼まれて社の車にのつて、上野のお成り街道を神田明神の方へ入つた五軒町の橘絲重の自

宅を訪ねた。彼女は賑やかな商家の中にはさまれたひつそりとしたしもたやの小さい家に姉夫婦の家族と一緒に住んでいた。

「このたびはお目でとうございます。ついてはお写真を拝借に上つたのですが」彼は夕刊に間に合わせるために急いで用件を切りだした。取次にでゝきたのは七十がらみの老婆で、姉らしかつた。

「折角、おいで頂きましたが、まだ、別に文部省からお話も受けておりません。さつきも新聞社の方がいらしつたのですが、妹は滅多に写真をとりませんし、古いのも震災ですつかり焼いてしまつて、宅には一枚もないのでございます。折角いらしつてお気の毒でございますが……」

森は狭い玄関に華やかな女の草履や靴が脱ぎ捨てられているのを横目でみ乍ら、これは駄目だと観念して、すぐ上野の音楽学校に廻り、そこで卒業写真の中から彼女の写つているのを借りて社に帰つてきた。

橘絲重というピアニストは音楽学校だけを自分の世界として、殆ど世間とは没交渉に一生を送つた芸術家である。

〈刻　苦〉

橘絲重は明治六年に伊勢の旧亀山藩の御典医の家に生れた。父は五人の子女を残して早く亡くなつたので、末つ子の彼女は長兄の良選に引きとられて育つた。長兄は東大医学部の前身である南校をでゝ、父祖の業をつぎ、大阪、鹿児島、仙台と転々として病院長をしていたが、絲重が十歳位のときに彼もまた卅五六歳で世を去つた。

彼女は東京の本郷妻恋坂の家で育つたが、次弟はまだ若く、東大在学中にこれも逝くなり、次姉絹重の婚家山崎家に依つて面倒をみて貰つていた。音楽取調所が東京音楽学校となつたのは、明治廿年十月である。その翌年の生徒募集に絲重は応じたのである。小さいときから箏を習らわせられていたことが、彼女を音楽の世界に導いたのだ。橘一家は早くから東京へでゝいた。それで同郷の歌人佐々木弘綱が出京したときも、一時、妻恋の家にいた位なので、絲重は小さい時から卅一文字に親しむことも知つていた。——彼女がピアニストとしてだけでなく、佐々木信綱（弘綱の息）の竹柏園の歌人として、その作が「新万葉集」に二三十首載せられていることも記憶されてよい——

好学心にとんだ一家の中にあつて、箏曲や短歌を友として十六歳を迎えた彼女が、音楽を以つて身をたてようとしたことは、一つには彼女の芸術的意欲の表れであると云えるが、一つには、それによつて経済的な独立を固めたいという健気な決心があつたからだ。

彼女の学資は山崎家でだしてくれることになつた。そして、姉の絹重は絲重のすぐ上の姉の栄重に産婆学を学ばせていたが、これを山崎の友人の鈴木に嫁がせて、絲重を鈴木夫婦に預けて本郷の家においたのだつた。彼女が音楽学校へ入つた歳の十一月にオースタリー人のルドルフ・ディトリッヒが外人教師として着任した。翌年には先輩の幸田延子が六年の長い海外留学に鹿島立ち、廿三年五月には上野の新校舎も落成した。ピアノなどゝ云う楽器が東京にそうなかつた時代である。彼女は学資を他から貰つている手前も優等生でなければならないのだつた。それには学校から帰つてからの勉強が大切である。彼女はその頃、神田にできたクリスト教の教会に入つて、そこのオルガンを借りて勉強したのだつた。教会ではオルガン奏者に困つていたから悦んで彼女を迎えた。それで、彼女は特別に信

心気があつてゞなく洗礼も受けたのだつた――五十年後にこの教会は古い名簿でもみたのか芸術院会員である彼女の死を知つて、葬式をやらしてくれと申し込んできたと云うことだ。――

彼女は明治廿五年七月九日、見事に一番の成績で音楽学校を卒業した。同級生には「汽笛一声新橋を……」の鉄道唱歌を作つた多梅雅、などがいた。彼女は卒業後もずつと母校に残つて教鞭をとることができた。一番でないと地方の教師にされる恐れがあつた。これは鈴木一家を背負わねばならぬ彼女にとつて最も怖れていた処だつたのである。音楽学校は廿六年九月から東京高等師範学校の附属校になつた。これは予算の関係らしい。廿八年夏にはヂィトリッヒが帰国したが、十二月に幸田延子が帰朝した。ヴィンでヘルメスベルガーにヴァイオリンを習つた幸田は翌廿九年四月十八日の帰朝記念演奏会にメンデルスゾーンのあの有名なホ短調コンチェルトの第一楽章を弾いた。この時にピアノを受持つたのが絲重だつたのである。

絲重は決して美人と云うのではなかつた。併し、日本人として大柄な恰服のいゝ女だつた。ピアノと云うハイカラの楽器の奏者として、また短歌をよくする閨秀として、彼女にはどこか備つた気品があつた。音楽教授と殆ど同時に明治廿二年二月に東京美術学校が上野に開設され、岡倉天心と米人フェノロサが熱心に青年画家を育成した。その第一回の卒業生に大観横山秀麿がいた。彼は群を抜いた秀才でその日本画に加えた新風は新時代の颯爽さを示していた。

美校の秀才横山大観と音校の秀才橘絲重のロマンスが上野の森に拡つたのは無理もなかつた。大観は絲重より五歳の年長である。彼女の毅然とした容姿は、青年画家に何か印象づけたものがあつたのだろう。だが、この二人の間には噂さ以上の発展はなかつたようだ。長いキモノの袂を靡してピアノの鍵盤の上を叩く彼女の姿にも、いかにも新鮮なものがあつた。後年長谷川時雨は「明治美人伝」の中で、島崎藤村が絲重に恋を抱いていたと云うこと誌るしている。そして藤村の「水彩画家」のモデルになつているのだと述べた。実際に文学趣味のあつた絲重は軽井沢に行つたついでに、小諸の藤村を訪ねたことがある。藤村の「家」を読むと、そこに絲重の面影がみられないでもない。実際に藤村が明治女学校を教えていた時代に、彼の生徒に文学少女中村田都子と云う絲重の親戚の娘がいたのである。上野の演奏会の常連だつた藤村の目に彼女の姿が忘れられず、その少女に絲重の人となりを訊ねたことも想像できるような気がする。

明治卅一年五月、六年前に東大の哲学教授として来任したラファエル・フォン・ケーベル博士が上野のピアノの講師を兼ねることになつた。ケーベル博士は一八四八年ドイツ人を父としてロシアのニシニ・ノヴゴロドで生れ、モスコーの音楽学校に学び、後ドイツに越き、イエ・ナハイデルベルヒ大学で哲学と文学を修め、音楽史や美学をミュンヘンで講じていた哲人である。我国にきて東大の教壇に立つ傍ら、乞われると慈善音楽会などでピアノを弾いていたが、一生を独身で通した博士の生活には隠者のような清潔で高い思想と香気が溢れていた。博士が上野に現われたときは丁度五十歳だつたが、既に六十を越えた老人のような印象を生徒達に与えた。絲重の一生はケーベル博士を識ることによつて大きく転

同した。

《師　弟》

梅雨明けの蒸し暑い午後だつた。暑中休暇になると多くの外人達は軽井沢や箱根に日本の夏を避けたが、ケーベル博士は決して東京から他へは出かけようとはしなかつた。彼は知らぬ土地で自分の精神と生活に不必要な刺戟を受けることを欲しなかつた。気心のよく判つた書生であり内弟子のKと料理人と猫がいれば充分だつたのである。博士は広間のピアノの蓋をあけると、毛の生えた太い白い手を鍵盤の上に置いて静かにバッハの組曲の一章をひきだした。家中のコトリも音のしない静けさの中で、彼は目をあいているのか、つぶつているのか判らない。澄み切つた響きが魂の隅々に泌みこんでくるようである。博士の演奏は他人に聴かせるためではない。作曲者バッハとの会話なのである。彼は自分の打つ音の中に自分の言葉とバッハの言葉をもつている。演奏というものが高貴な芸術である限り、そう云う境地が絶対に必要だと彼は信じていた。だから、ある場合には楽器の音を通じてでなしに、楽譜を読むことで充分な芸術的経験は得られるとすら考えていた。

下手な、或ははつたりの多い演奏は芸術のためには悪である。だから日本にきてからの彼は総譜によつてのみ室内楽や管弦楽曲を彼は嫌んでいるというのだつた。外の熱気を防ぐために窓の鎧戸は半分下ろしてあつた。その窓に猫が眠つていて、その後に庭の芭蕉の大きな葉が鮮やかな緑の青さをみせている。

玄関の方でベルの音がした。鼻嬢（フラウエンノーゼ）（博士が彼女につけた仇名）の来訪だ！が、博士はピアノの手を止めなかつた。バッハが急ににこ〳〵して上機嫌に話しかけてきた。彼も陽気な調子で答えた。彼にとつて物倦い夏の午後の一、二時間を遥るかなドイツを想いだし乍ら、真面目な彼のピアノの生徒と音楽について語ることはこの上ない慰めだつたのだ。ピアノから離れて後を向いたとき、そこには黒つぽい夏の薄いキモノをつけた橘絲重が立つていた。

「少し早すぎましたでしようか？」「いや待つていた位だ」太い手が彼女の手を掴んで傍の椅子にかけさせた。

「私は昨夜は、夢をみた、子供の時にみた自由射手の舞台だ！これは、きつと私をドイツに誘つているのだ。自由射手！　私はこの曲をきくとドイツを思いださずにはいられない。ドイツは正確に云うと私の故郷ではない。私はロシアで生れたのだから。併し、私はドイツを一番愛している。バッハ、ベートーヴェン、ブラームスの三Bの生れた国、モーツァルトやシューベルトやメンデルスゾーンが生活した国！　私にとつて、自由射手とドイツは同義語のような気がする。私はたまらなくドイツに憧憬れる！」

「先生は、ドイツにお帰えりになるのですか？」

「いつかは。だが今は残念乍ら私はこの国にまだ任務があるようだ。また、帰るとしても、私は相当に重い心をもつて帰らねばならない。なぜならこの土地に少数ではあるが、真に愛する友人や学生をもつている。彼らと別れることは辛いことだ！」

「先生がドイツにお帰えりになつたら、私達はどうしたらよいでしよう」

「いや将来のことを思い煩う必要はない。我々は幸いにして魂の言葉をもつている。シルラーは『魂を言表するものは唯音楽あるのみ』と云つている。尤も彼はすぐその

後で、〝魂にして言葉を発するとき、おゝ魂はもはや語らざるなり〟と云つているが音楽では魂が……自由に語ることができる。音楽を持つものは悲しみに打ち克つこともできる！」

彼女の後輩の安藤幸子が、滝廉太郎が、島崎赤太郎が、それ〳〵ヨーロッパに留学を命ぜられたが、彼女は一家の稼ぎ手としてそう云う余猶をもち得なかつた。けれどその代りに彼女はヨーロッパの高い教養と芸術性をもつケーベル博士に親しんで、大きな芸術的な目を開いて貰つてきた。それは音楽が単なるピアノやヴァイオリンの小手先きの仕事でない魂の問題であるという開眼である。が、その先達の博士を今失うことは彼女に耐えられなかつた。いつかは先生も帰国される。そのときは一切を擲つて自分もついてゆこうと彼女は決心した。そしてレッスンを終つて五軒町の自宅に帰る間中に、曾つて博士からきいたアッシジの聖者聖フランシスとその弟子のクララとの世にも聖い愛を想い浮べて、自づと頬の赤らむのを覚えたのであつた。

〈余　生〉

「音楽と云うものは演奏されてこそ芸術なんだ。楽譜は芸術じゃない！」「そりゃアそうさ。だが、演奏されたものがすべて芸術とは限らないぜ、例えば貴様のムーンライトの如く」「俺達のことは別だよ。芸術家として演奏しないというのはおかしい。弾かざるピアニスト、描かざる画家なんてのはノンセンスだよ。橘先生は立派な教師かも知れないが芸術家じゃない。弾く意力がないんだから」

「うん、成程、ピアニストじゃないかも知れん。だが、芸術家である。俺はそう思うな、ケーベルさんが、そうであつた如く、この意味じゃア学校に一人だつて芸術家なんぞいないぞ！」

ケーベル博士の最も愛される弟子の一人となつてからの彼女はもう殆ど公開の席では演奏をしなくなつた。だから今日の楽壇人で彼女のフランス風とも云える典雅な演奏をきいている人はごく少いだろう。青葉の上野公園を声高に彼女についてこんなことを語りあつている位だ。同時に「心の花」に発表していた短歌も次第に影をひそめてきた。

「摘れけり捨てられにけり踏まれけり、すぐせ恋しき名もあらぬ花」——彼女の歌について、佐々木信綱は柳原白蓮の情熱歌は橘絲軍から出ていると語つたそうだが、真珠の慎しい美しさを愛していた彼女は涙脆い処とともに、頭の良い肉皮さも持つていた。弘田竜太郎が卒業当時、「先生、お宅へ伺いますよ。また教えて下さい」と云うと「あら、教えにいらつしやるんつもりじゃないの！」とやりかえしたり、「淑女は駄洒落を慎むべし」と云われると「紳士はよだれを慎むべし」とすぐ言下に応酬するような機智にも富んでいた。

ケーベル博士は大正三年東大を去り、同十二年六月に横浜で逝去した。彼女がその死から受けたショックは想像に絶するものだつた。併しそれから十六年、彼女は後に残つた。昭和十四年八月卅一日、彼女は五軒町の家で六十六歳の生涯を終えたのである。その前々年に芸術院会員に推されていたのだつた。

彼女は封建時代の物堅さと潔癖性にケーベル博士の隠遁的厭人癖を受けつぎ、独身乍ら大家族を背負つて人生を送つたのである。演奏家としての功績に華々しいものはなかつたが、日本人で高い音楽生活を経験した唯一の存在といえるかも知れない。

音楽友の会のお知らせ

◆小社発行の音楽雑誌（音楽之友、音楽芸術、レコード芸術、教育音楽）の愛読者からなる「音楽友の会」が、今春から発足いたしましたところ、多数の方々が入会され誌上からお礼申し上げます。只今、各雑誌の編集部ごとに整理いたしまして、「会員証」と友の会バッジを発送しております。此の雑誌がお手元に着く頃入手されることと存じます。

◆次に各雑誌の「音楽友の会」欄に皆様の雑誌に対する御要望、皆様同志の意見交換、各地のニュース、サークルの催しのお知らせ等々を掲載いたしたいと思いますからドシドシ各雑誌の「友の会」宛原稿をお送り下さい。

◆新たに入会されたい方は、氏名、年令、住所、愛読してる雑誌、学校名（職業）合唱団その他所属の音楽団体名、友の会への希望、等をお書きのうえ、入会費一年分五十円、バッジ代五十円計百円（十円切手十枚）を添えてお申込み下さい。

◆毎月「友の会」欄に地区ごとに会員名簿を掲載しますから、支部を結成されたい方は名簿により支部結成のうえ、本部に御通知ください。支部主催にて音楽会、講演会、座談会等を催す場合、講師や芸術家の斡せんなどの御相談に応じます。

――会員のお便り――

◆拝啓陽春花咲き匂う絶好のシーズンを迎え貴社には益々御多忙の事と拝察致します。〝音楽之友〟五月号にて友の会、会員募集のあるのを見て直ぐに申込んだ次第です。九州の最南端の当市ではクラシック音楽に理解する人が少なく心淋しい折から毎月迎える〝音楽之友〟にて私の心は十分に満たされて居りますが、この音楽を愛する喜びを共に語り合う事が出来ないのが又残念で心淋しいのでしたが「友の会」に入会して自分の好きなショパンの曲に理解ある人々の御意見なりを交換出来たら更に素晴らしいだろうと思つて居ます。何分友の会に入り私の音楽の友を得たいです何卒宜しく御願い致します。

鹿児島県枕崎市枕崎三三五五　田中　武郎

音楽友の会の皆様、御元気の事と存じます。音楽之友の愛読者の一人ですが、此らの雑誌に依り、種々と参考になる事を喜んで居ります。今回仲間入りさせて戴き、皆様の御指導を受け、音楽に対する理解をよりよくしたいと思つています。グループを組織して、加入すれば良いのですが、身近に呼びかける仲間もありません。一人での加入ですが、是非御願い致し度く申込みました。よろしく御願い致します。

新宿区柏木二ノ一九五共栄社　永田善三郎

◆僕はどうにかして日本の国の人達がよい音楽を愛好するようになつていただけたらと思つています。外国の人達の中に音楽という物がかよつているように思えるが日本の国の人達がすくないように思えるのです。それにして音楽友の会などという便利といいましようか実にうれしい感じです。日本の北海道から九州の人達と手をつなぐ事が出来るではありませんか、ぼくはこの音楽友の会の一員となつて日本の国の平和をちかいたいと思います。中学三年卒業したばかりですがおなかまへ入れてもらえたならさぞかし幸福だと思います。

神奈川県横浜市戸塚区戸塚町四一七二　長坂　幸男

音楽之友　第十二巻第七号
定価　百円　地方価　百二円
昭和二十九年六月二十五日印刷
昭和二十九年七月一日発行
発行兼印刷兼編集人　東京都千代田区神田鍛冶町二ノ十　目黒三策
発行所　株式会社音楽之友社
電話神田(25)八〇五・三二八三・七三九三番
振替東京一九六二五〇番
東京都品川区南品川五ノ十三
印刷所　富士高速印刷株式会社